

来て!見て!知って!文化財

文殊寺「仁王門」

懸魚げぎよが守る朱塗りの門 所在地:野原623

文殊寺は、古くは能満寺のうまんじという古刹こさつでしたが、室町時代の文明13年(1481)に焼失し、その2年後に高見城(現在の小川町)の城主であった増田四郎重富ますだ しろうしげとみが再建しました。その際に知恵をつかさどる文殊菩薩を祀り、文殊寺と称したことに始まります。

その参道の始点に位置する朱塗りの門が、熊谷市指定有形文化財(建造物)の「仁王門」です。建築様式および弁柄べんがらを塗り合わせる方法などから門の建立時期は、江戸時代中期であると推定されています。仁王門は八脚門かりづまの構造であり、屋根は二つの傾斜面が重なり合う切妻造りの形状です。門中の左右には仁王像が安置されており、静かなる威厳を感じる門です。

『新編武蔵風土記稿』(19世紀初頭)には、文殊寺の伽

藍らん(寺院境内の配置)について、本堂や山門、仁王門などの約10棟の建物によって構成されていたことが記載されていますが、度重なる火災等で、を残す建造物は仁王門だけとなっています。

なお、仁王門の屋根下にある破風板には、「蕪懸魚かぶらげぎよ」と呼ばれる木彫りの魚の飾りが付けられています。これは水と関わりの深い魚を屋根に懸けることによって、火災を予防するというものです。過去の度重なる火災から仁王門が守られたのは、この懸魚の御利益なのかも知れません。

◆江南文化財センター ☎048-536-5062(山下祐樹)

